
ひきこもりの異世界探索記

さばんな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひきこもりの異世界探索記

【Nコード】

N4369Z

【作者名】

さばんな

【あらすじ】

異世界なんていいもんじゃないね。少なくともなじみ深い元の世界の方がいい。

たとえば、俺がひきこもりでもだ。

これはひきこもりの異世界譚。

異世界でもひきこもるのか？ それとも何かを成し、ひきこもりの不名誉を脱せるか？！

「俺は、こうやって諦めてきただろう？」

「最後までできたことなんて無かった」

「らしくない、諦めたらどうだ？」

「やめとけやめとけ、どうせ途中で終わりだ」

囁く自分の心の闇。

ひきこもりは、打ち勝てるのか。

「もう、諦めたく、ないんだ！」

まよひこみ(前書き)

よくある例のアレです。

まよいこみ

俺は、ひきこもりである。

一年近く部屋から出てなかったし、この先出ることも数える程しかないと思っていた、のだが。

「どこだよ、ここ……」

ずり落ちてくる眼鏡をくい、と押し上げながら、周りを見渡す。

「森……」

青々しい木々に、暖かな日差し。森だと思う。まあ別に森でなくともよい。問題は、部屋にいたら何時の間にか外にいたということだ。

「訳が、わからん」

口に出したところで、何も変わりはず。依然として色彩豊かな植物が我こそは光を浴びんと競い合っていた。

そういえば明るい。確か深夜だったはずだが、と思い返す。

「夢か」

そう結論づけて、考えるのをやめた。

二十歳の誕生日のことであった。

光の中で

考えるのをやめたところで何かが変わるわけでもなく。青年、もとい、天津悠斗あまつ ゆうとはすることもない。

開けた場所で草の上に座り込み、降り注ぐ光の中、こっくりこっくりと船を漕いでいた。

あたりは静かである。ちちち、ぴーちちち、と鳥が鳴く。

それを子守唄に、意識を手放そうとしていた悠斗の頭に、ぽと、と何かが落ちてきた。花であった。

綺麗だな、そこらの木のものかな、と寝ぼけまなこで空を見上げる。

ぽと、ぽと。

鳥が花をくわえては落とす。またひとつ。どこから飛んできては、ひとつひとつ悠斗の周りに落としていく。まるで祝福されているようだ。

まあ夢だしな、なんでもありか。そう思い、目を閉じる悠斗。日の光が暖かく、微かな花の匂いが鼻をくすぐる。

安らぐ。

夢なのが勿体無いな、と思ったのを最後に、意識は薄れていった。

目覚め（前書き）

5話分程の書き溜めが消し飛んだのは不幸な事故だった。
まあ、洗礼だとも思っておこうか。

目覚め

知らない天井だった。少し考えて、嘆息。

夢の中で寝たからといって、必ず目が覚めるというわけではないだけのことだった。

ぼーっとしていると、扉が開き、部屋に涼しい風が入ってくる。

「あ、起きてる」

部屋に入ってきたのは、赤ん坊を抱いた大きな女性であった。

返事をしようと口を開くが、一向に言葉は出てこない。約一年のひきこもり生活は、確かに俺に影響を与えているようだ。

「まだ生まれたばかりでしょう、無理はしないように」

その様子を見て、女性が諭してくる。生まれたばかりとはどういうことか。自分の身体を見下ろす。赤ん坊にはなっていないくてほっとした。だが、ベッドが大きすぎる気がして、他の家具も見渡す。どれも、大きい。巨人の家に入り込んだみたいだ。

きよろきよろとあたりを見回す俺を見て、くすくすと笑うリリー。思わず赤面してしまった。

「あ……」

小さく喉からでた声は、子供の声のように高く、少し驚く。女性がない？ と耳を寄せてくる。

「ここは、どこですか……？」

それが、ひさしぶりの人との会話の第一声だった。

精霊の森。別名、祝福の森。

この村のそばにあるその森に新生児を連れていけば、その子は精霊に愛される子になるという。

女性ーリリーと名乗ったーが、抱いている子の祝福のために森に入ったところ、俺が祝福されて倒れていたらしい。

祝福されているような気がしたのは、気のせいでは無かったというとか。精霊云々はともかく。

でも。でもだ。俺は赤ん坊ではない。確かに、リリーや家具は俺にとってはビッグサイズである。だが、俺は二十歳である。はいはいもしないし、歯も生え揃っている。言葉も話せる。

そのことを口下手ながらもリリーに伝えると。

「祝福されないよりは、祝福された方がいいでしょう？」

それはそうだろうが。じゃあ、寝ていなさい、とはぐらかすようにリリーは言い、部屋を出て行った。

ひとりで起きていてもな、と目を閉じ、意識を落とそうとした。

しかし、なかなか眠りにつけない。そういえば、俺はいったいどのくらい寝ていたのだろうか。長く寝ていたのなら、やすやすと寝れるはずもない。

仕方がないので、ぼーっとしてみると、外の音が流れ込んでくる。鳥の声に、子供の元気な声。風の音に、大人の会話。

それらに耳を傾けていると、この広い部屋の中にひとりであることが、酷く孤独に思えてくる。身体はともかく、精神は子供っぽくなったのだろうか。寂しい。

あくびとともに出てきた涙を拭い、ベッドに潜り込む。

夢の中でまで、俺はひとりか。

無性に日の光が恋しくなった。

小さくなった身体を眺めながら、何も考えずにぼんやりしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4369z/>

ひきこもりの異世界探索記

2011年12月15日14時55分発行